サロマ湖のホタテガイ増養殖の発展に関する二つの記念碑

野村哲一

サロマ湖は北海道の北東部、オホーツク海沿岸の湧別町、北見市、佐呂間町の三市町にまたがる広さ約150㎢の汽水湖である。湖としては我が国では琵琶湖、霞ケ浦に次いで三番目に大きく、汽水湖としては我が国最大、漁業法上は海面に指定されている。同湖には、オホーツク海と繋がる湖口が2ヶ所あり、現在では塩分濃度が31～33‰と通常の海水に近い状態となっている。

サロマ湖は北海道におけるホタテガイの増養殖にとって先駆的な役割を果たした地で、湖岸には二基のホタテガイの増養殖技術の確立に向けた先人の努力とそれを受け継いで発展させた漁業者の活動に関する碑が建立されている。二つの碑とも、碑上部には高さ2mほどのホタテガイを模した像がある。

一つは、北見市常呂町栄浦（旧常呂郡常呂町栄浦）に昭和58（1983）年に常呂漁業協同組合が建立した「ほたて養殖発祥之地」の碑（写真1.）であり、もう一つは佐呂間町富武士（とっぷし）に昭和60（1985）年に佐呂間漁業協同組合により建立された「ふるさとに永久に育てよホタテ貝」と刻まれた碑（写真2.）である。

写真1.　北見市常呂町栄浦に建立されている「ほたて養殖発祥之地」の碑。背景はサロマ湖。

写真2.　佐呂間町富武士に建立されている「ふるさとに永久に育てよホタテ貝」の碑。漁協の駐車場の一角にある。

それぞれの碑文を以下に示す。

碑　文

我が国における帆立貝は太平洋岸では東京湾、日本海岸では富山湾を南限として東北、北海道に広く分布しているが、オホーツク海の生産量は他の海域の追従を許さず二〇〇海里時代による厳しい漁業情勢下にあつて、この海を生活の場とする我々漁民に限りない恩恵を与えている。

而し、現在の帆立貝増養殖漁業の飛躍的発展成長の礎となつたのは、昭和九年帆立貝の種づくりに取り組み、諸種の困難に直面しながらも増養殖事業の先鞭をつけられた北海道水産試験場増殖部長農学博士木下虎一郎氏、並びに常呂漁業協同組合長常呂町名誉町民新谷広治氏の偉大なる先見の明によるものであり、オホーツクの海はこれら先人達の力によつて今日の宝の海に創造されたと云つても過言ではなく、帆立貝の種苗生産と資源管理に関する技術と理念は、総ての帆立貝増養殖漁業者に受継がれその偉業は栽培漁業の主柱として全国的展開を示している。

昭和五十八年十一月
常呂漁業協同組合
組合長理事　小笠原　敬

図1.「ほたて養殖発祥之地」の碑文

碑　文

ホタテ貝は古くから北海道海域に自然繁殖しつつ分布され一時期は極めて盛況な時代を経過したが乱獲や病害等により資源は枯渇し、昭和三十年代は操業困難の状況にあった。
昭和四年サロマ湖とオホーツク海を結ぶ湖口が永久化され、昭和六年湖内にホタテ稚貝の発生が確認され、昭和九年以降道立水産試験場農学博士木下虎一郎氏を中心として採苗試験が重ねられた結果、本道唯一の採苗基地として確認されたのである。
前記の採苗試験を契機として佐呂間漁業協同組合青年部員が企業化のため更に調査研究を続けた結果、延縄式採苗法と結氷下に於ける中間育成技術の開発に成功し、全国にさきがけて昭和三十九年養殖漁業を見事結実させたのである。
爾来、この技術と理念は全国養殖漁業者に受け継がれ今日の発展を収めたのである。
サロマ湖周辺で意義深い第五回全国豊かな海づくり大会が開催され、ホタテ養殖漁業発祥の地である本組合に皇太子殿下、同妃殿下の行啓を記念し組合員の総意により建立したものである。

昭和六十年九月
佐呂間漁業協同組合
組合長理事　船木長太郎

図2.「ふるさとに永久に育てよホタテ貝」の碑文

いずれの碑でも、碑文と題してサロマ湖におけるホタテガイ増養殖の歴史と技術開発における、北海道水産試験場（現北海道区水産研究所）増殖部長農学博士木下虎一郎氏の尽力があったことや、この碑の建立の趣旨が刻まれている。この二つの碑文はほぼ同様の内容となっており、いままで紹介した顕彰碑とは少し趣を異にするものではあるが、刻まれている木下博士と協力した漁協青年部のホタテガイ増養殖に関する技術開発への顕彰の意味と、同時にホタテガイ増養殖を後世まで継続して発展させたいとする気持ちが込められている碑とも考えられる。

サロマ湖のホタテガイ養殖は一朝一夕に確立されたものではない。

古来、サロマ湖の湖口はアイヌ語でトーフツと呼ばれていた常呂町鐺沸（現北見市常呂町栄浦）であったが、その湖口は恒常的に開いているものではなく、秋から冬にかけては激しい時化による漂砂により閉塞し、湖面の上昇により湖周辺の農地が浸水したり、春遅くまで外海への出漁が困難になったりしていた。鐺沸付近の住民は、春には「潮きり」とよばれる重労働の開削を毎年繰り返していた。湖口の閉塞の悪影響を排除するため、昭和4（1929）年に湧別町側において公費による補助事業として行った大規模な砂州の開削が成功し、固定化された湖口が完成した。湖口の固定化により、冬季には外海より2mも高かった湖水の水面は周年外海と同じレベルまで低下し、漁業や農業に対する悪影響は軽減されたが、当然ながら、外界からの海水の流入は湖内の環境を大きく変化させ、鐺沸地区のカキ島の衰退などにより、当時地区の漁業の主体であったカキ漁業に大きな変化をもたらした（注1.）。昭和53（1978）年には第二湖口が開削され、さらにサロマ湖の環境改善が図られたとされている。

湖口の固定化による外界からの海水のサロマ湖への流入の増加は、同時に外海から湖内へのホタテガイの分布の拡大という「恵み」をサロマ湖にもたらした。サロマ湖はカキの採苗地であったが、カキの採苗装置にホタテガイの稚貝が付着・成長していることが昭和6（1931）年に観察されている。これが、サロマ湖のホタテガイ増養殖に一筋の光が見えた時である。漁業者はこのホタテガイの稚貝に注目し、昭和9（1934）年にはこの二つの碑に名前が刻まれている木下虎一郎博士の協力を得てホタテガイ養殖試験を開始した。しかし、冬季間における湖面の凍結

など、厳しい環境により目標とした中間育成技術の開発には長期間の試行錯誤が必要であった。まだ技術開発の途中であった終戦後には、北方領土から引揚げてきた漁業者のサロマ湖周辺への入植などもあり、サロマ湖における漁業資源の枯渇が心配され、ホタテガイにおいても禁漁を繰り返す事態となった。新たな水産資源の創出が強く求められ、「ホタテにしか生きる道はない」とするホタテガイ増養殖を熱望する状況も出現した。碑文にあるように昭和39（1964）年に北海道水産試験場と漁協青年部の共同による調査と試行錯誤から、後にサロマ湖方式と呼ばれる垂下・延縄方式による結氷下での越冬技術が確立され企業化へと歩みを進めた。昭和9年の試験着手以来、実に30年に及ぶ努力の末の企業化である。

また、「ほたて養殖発祥之地」に刻まれた、新谷広治氏は、昭和10（1935）年に常呂漁業協同組合の組合長に就任し、ホタテガイ養殖の現場における調査研究のよき理解者であり協力者であった。当時としては全国的にもめずらしかった、漁業協同組合立の佐呂間湖水産増殖研究所を設立し、外部からの研究者を支援することにも尽力した。昭和27（1952）年には、サロマ湖のホタテガイ増養殖の持続的な発展に大きな役割を果たす、サロマ湖養殖漁業協同組合を設立し組合長に就任するなどして、サロマ湖におけるホタテガイ増養殖の発展に大きな貢献をしている（注2.）。

一方、これらのホタテガイ増養殖の基礎を築くにあたっては、自治体の支援も大きな役割を果たした。その一例として、船木長一郎元佐呂間町長の決断がある。当時の町予算の半分にも及ぶ債務保証をし、企業化への資金を確保したことなどが、「写真で語る　さろま物語　開基百年記念小史」（注3.）に掲載され、現在も佐呂間町の公式ホームページに公表されている「ホタテ談義」に見ることができる。

我が国のホタテガイの生産量は漁業と養殖業を合せて約37.1万トンであり、そのうち約76%が北海道での生産である（平成29年漁業・養殖業生産統計年報）。中でも、オホーツク沿岸では、サロマ湖に限らず、全域にわたりホタテガイは主要な水産資源となっておりホタテガイ漁業の地域における経済効果は大きなものがある。

昭和60年には第5回全国豊かな海づくり大会がサロマ湖を主会場として開催された（写真3.）。サロマ湖が同大会の会場に選ばれたのも、ホタテガイの中間育成に成功したことや新たな加工技術の開発などサロマ湖を利用・管理する組合の取り組みが、28万トンにも及ぶ北海道内のホタテガイの生産や沿岸漁業の振興に極めて大きく貢献していることを内外が認めていることを示すものであろう。

写真３．北見市常呂町栄浦に建立されている第5回全国豊かな海づくり大会の記念碑。ほたて養殖発祥之地の碑の隣にある。

注１．永田次男・豊原熙司. 2008. サロマ湖のカキと鐺沸. ところ文庫24, 64pp. 常呂町郷土研究同好会.

注２．サロマ湖養殖漁業協同組合. 1999. サロマ湖の風―連帯と共生. サロマ湖養殖漁業協同組合発行.（第一巻　生命の息吹き, 第二巻　三つの漁業協同組合, 第三巻　英知の結集と連帯）.

注３．佐呂間町史編さん委員会編. 1995. 写真で語る　さろま物語　開基百年記念小史. 佐呂間町発行.